

会 議 概 要

- 1 会議名 第1回安曇野市多様性を尊重し合う共生社会づくり審議会
- 2 日 時 令和6年5月30日(木) 午後2時から午後4時00分
- 3 会 場 市役所本庁舎4階 大会議室
- 4 出席者 (敬称略) 尾碁ゆみ、平倉勝美、平林良人、嶋田奈麻美、臼井良孔、北村早希、布山直利、原田邦彦、二木正之、塚平一彦、降旗幸子、剛佈和、丸山美枝、石田悠真、森下右里子、丸山雅秋
- 5 担当課出席者 人権共生課長 財津、人権共生課長補佐 櫻井、風間、赤羽、大場
- 6 公開・非公開の別 公開
- 7 傍聴人 0人 記者 0人

1 開会(人権共生課長)

2 会長あいさつ

条例に基づき、計画がスタートし、計画に沿って施策の推進がなされている。令和5年度の取り組み及び評価、令和6年度の具体的取組について、本日がこのメンバーで最後の会議なので、忌憚ないご意見をお願いしたい。

3 協議事項 【発言者 ◎会長 / ・委員 / ⇒人権共生課】

(1) 副会長選出

・副会長 : 松本人権擁護委員協議会安曇野部会 臼井 良孔 様

(2) 共生社会づくり計画推進施策令和5年度報告及び令和6年度計画について(人権共生課説明)

【質疑応答】

- ・貞享義民記念館の展示はとても良かった。別のところでも、展示できないか。
⇒人権のつどいでも展示している。義民館だけでなく、他の公民館等で展示できないか検討する。
- ・目標を達成していたり、数値が上がってきていたりしているのは、良かった。2年間審議会委員として関わってきて、ユニバーサルデザインの冊子やイベント等で、発達障害や性的マイノリティなどにも配慮されるようになり、包括されていると感じた。
- ・ユニバーサルデザインガイドブックの表紙についても、前回の意見が反映されたものとなり、良かった。
- ・学校では、子どもの方が多様性を受容している。大人の方が子どもを見習わなければならないと感じている。女の子がネクタイを着用したり、野球をしたりするのは、受け入れられてきたと感じるが、男の子が女の子らしいものをとるという逆のパターンはなかなかカミングアウトしにくいのではないかと感じる。そういう子どもをどのように救い上げるのが課題。どのような子も生きづらさを感じさせないようにしなくてはいけない。
- ・教員の働き方に関しては、残業が減ってきている。これは、周囲の協力があるからこそ。男性の育休も身近になってきた。行政側からの発信のおかげもあるのではないかと感じている。
- ・計画を見ても子どもの意識の育成や不登校、引きこもりなどに関しても、多くのセクション、課が関わっている。特に不登校や引きこもりに関してはネガティブに捉えられがちだが、多くの人

が関わることで、いろいろな考え方が取り入れられ、救われる子どもも多い。多様な学びの教室など、通常学級に戻す以外の方法を取ることができるようになった。

- ・PTA 加入について、加入に消極的な人も増え、役員になりたがらない。また学校によっては、会長は男性と決まっているところもあるようだ。夫婦でどちらが出るのか、ケンカの原因になることもある。PTA がなくなってしまうことも真剣に考えなければならない中で、育成会の強化を考える。PTA は地区の育成会も兼務していることが多い。本来は、別。児童館に子どもを預けるしかないが、地域の子どものそこに放り込んでよいのか。児童館や公民館のイベントもあるが、送迎などの課題もあり、子どもに制限をかけてしまう。公民館事業を地区公民館と育成会や他のボランティア団体に協力をお願いするなど、PTA 活動ではなく地域に子どもたちをお願いすることで、高齢者も混じり、社協さんとも対応していく事業。組織が崩壊した時にどうなるかを含め、検討している。
- ・ユニバーサルデザインについて、市全体で文字等について、文書や資料等で指定などはあるのか。資料 1 の最終ページの数字などは小さくて読みにくい。

⇒今後、全庁的な取り組みにしていく必要がある。当課で、力を入れているのは、やさしい日本語や読みやすいフォント、分かち書き、ルビふりなど行っており、なるべく行政文書にも取り入れていくことが重要と考えている。資料 1 の最終ページについては、今後ホームページ上で公開する際に、文字を大きくして公開する。

- ・ドイツでは、人口の 20%が外国人または外国由来の人で企業の幹部や町の会議にも出ている。それだけの語学力があるということ。そこまでいかないと多文化共生にはならない。日本ではそれができていない。ボランティアでは会議ができるレベルまでいかない。
- ・日本語教育については、実際問題として難しい。研修ビザが廃止になり、就労できるビザで入国するようになるので、N4 レベル（簡単な会話）の人が多く入ってくる。新聞を読んだり、会議に参加したりするレベルを求めるならば、ボランティアではなく学校が必要。
- ・計画策定時には、計画を多くの人に伝えることも課題だったが、令和 5 年度に多くの施策掲げて動き出したことで、「共生社会」や「多文化共生」を知ってもらえた。市民の人が共生社会に関心を持ってもらい、考え、行動できるようにしていくことが今後の審議会の役割。
- ・今、日本では人口減少が進んでおり、外国人から選ばれるようにならないと交通やコンビニなど日本の維持ができない。国力が小さくなると、優秀な人材は他国へ流れ、日本へ来る外国人人材の質は落ちてしまう。日本が選ばれる国にならなくてはいけない。
- ・地区の中にも外国人がいる。ご近所での関わり合いや隣組単位での活動が多いこともあり、係や役員などにも積極的に入ってもらっている。外国の方という意識なく関わっている。
- ・区の役員についても、今まで男性ばかりだったところ、今年度からは女性にも多く入ってもらっている。

◎日本語教育については、市としてどこまでできるのか、課題となり得る。

⇒日本語教育推進法が令和元年にでき、翌年法に基づいた基本的な方向性が出された。県もそれに合わせて多文化共生プランを改訂し、市も昨年度から県の多文化共生モデル地域に選ばれており、モデル日本語教室を開催している。今までボランティアに支えられていた日本語教室だが、国の方針に沿って日本語教師の有資格者で行っており、学校現場でもそれが求められている。県としても、地域に根付かせたいということからモデル事業となっている。これらのノウハウを活かし

ながら今後進めていきたい。

- ・多文化共生については、計画策定後初めての取り組みとして1年間やってきた。「多文化共生」は多くの人に浸透したと感じる。外国人以外の人とも「共生」し、他人を認め、自分を認めていくことが、良い地域につながることで、地域の人にも浸透してきているのではないか。
- ・男性育休については、確実に求められている。若い世代の人たちは男性も育休を取るべきものだという意識をすでに持っている。上の世代が、それに追いついていくという時代。管理職向け研修は良いと思う。
- ・「男女共同参画社会づくり」から「ジェンダー平等・多様な性」へと変わってきた。「ジェンダー」もわかりづらいが、出前講座やイベント等を通じて少しずつ広まってきている。お互いにより良い生活にすることが目的。若い人の理解は進んでいるが、そういった若い人たちを受け入れられるように大人たちが変わらなければならない。
- ・ジェンダーの課題については「やらなければいけない」といったことが増えてきたが、押しつけではなく理解する必要がある。そうした変化を感じられるように持っていけたら良い。
- ・ジェンダーの展示を見る機会があったが、啓発パネルは大変わかりやすかった。社協の施設や公民館などいろいろなところでも展示したら良いと思う。
- ・高齢者に関しては、「自立して暮らせる環境の整備」とあるが、これを進めていってほしい。避難行動要支援者についても、毎年増えている。消防、警察、各地区にも共有されてはいるが、どう守っていくのが課題。安曇野市は災害のないところ。実際災害が起きたら、どう行動できるのか。どう行動すべきか、具体的にはないので、そのあたりも進めてほしい。
- ・「共生社会」は多くの人が抵抗なく、受け入れることが大事。前回、ユニバーサルデザインガイドブックの説明を受けた際は、こんなものを作ってどうするのかと感じていたが、出来上がったものを見ると、ユニバーサルデザインに興味のない人にも読みやすい、内容のよいものになった。
- ・市がどういうことをしているのか、今回の報告書も含め、もっと多くの人目に触れるようにしてもらいたい。市のホームページは、知りたいことになかなかたどり着けない。もっと使いやすいように改善してほしい。安曇野市が日本で一番住みやすい地域になってほしい。
- ・災害が一番気になる。いざ災害が起きたら、理屈はわかっているが、動けるのか不安。障がい者や高齢者、認知症の方もいるので、そういった方が災害時にどう動けばよいか講習会を開いてほしい。
- ・日本に生活している外国人では、国民健康保険や年金制度が分からない。収入や生活に直結しているので、皆にわかりやすい方法で伝えられるよう、説明会や資料などがあると良いと思う。

4 閉会

(以上)